

# Have 構文の曖昧性について

西尾美穂

(高知大学教育研究部人文社会科学系人文社会科学部門)

On the Ambiguity of the *Have* Construction

Miho Nishio

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster Humanities and Social Science Unit*

**Abstract:** The *Have* construction, *have* + object + past participle, receives two interpretations, namely causation and experience. In this paper, we consider why the *Have* construction exhibits this ambiguity. Taking into account the fact that Causative and experiential *Have* constructions exhibit different behavior phonetically, syntactically, and semantically, we assume that the verb *have* has two distinct meanings rather than one abstract possessive meaning, and propose to derive the causative dynamic and experiential stative meanings via different paths.

キーワード：過去分詞, 使役, 経験

Keyword: past participle, causative, experiential

## 1. はじめに

動詞 have は、目的語 (名詞句) または補文 (名詞句+不定詞 / 過去分詞 / 現在分詞) を補部としてとり、様々な意味を表す。

- (1) a. John had the students read three articles. (使役)  
 b. John had a party. (出来事名詞 nominal event)  
 c. John had his car stolen. (経験)  
 d. John has a hat on today. (場所)  
 e. John has a sister. (分離不可能な所有)  
 f. John has a new car. (分離可能な所有)  
 g. George had us all laughing. (使役)

(a-f Ritter and Rosen (1997: 296), g 『英語基本動詞事典』 p.703)

中でも「Have+目的語+過去分詞」構文 (以下, Have 構文と呼ぶ) は、同一の形式で「使役」と「経験」の二つの意味を表すことができ、特に興味深い。

- (2) a. He had his shoes shined.  
 b. I had Mary examined by the committee.  
 c. I'm having a new house built.  
 d. Please have the matter taken care of.  
 e. You don't have your hair cut every week, do you?
- (3) a. Charles I had his head cut off.  
 b. My friend had his watch stolen.  
 c. He had two of his teeth knocked out in the fight.  
 d. You know he doesn't want to have his train of thought broken.  
 e. I wish the man who invented barbed wire had it wound round him in a ball.

(『英語基本動詞事典』 pp.700-701)

(2) の Have 構文は使役の意味を表し、(3) の Have 構文は経験の意味を表す。それだけでは使役の意味か経験の意味か曖昧な Have 構文もある。(4) の例文は曖昧であり、使役「ジョンは図書館から本を盗ませた」と経験「ジョンは図書館から本を盗まれた」の二つの意味に解釈できる。(「ジョンは図書館から盗まれた本を持っていた」という意味にも解釈できるが、この場合は過去分詞が先行する名詞の修飾語として機能する別の構文である。)

- (4) John had a book stolen from the library.

(『英語基本動詞事典』 p.701)

経験の Have 構文は、完了の意味を表すこともある。

- (5) a. John has a car parked at the curb.  
 b. Have the job done by tomorrow.

(『英語基本動詞事典』 p.701)

本稿では、動詞 have の意味を中心に、なぜ Have 構文がこのような多義性を示すのかを考察する。

## 2. 単一動詞・同一義とする分析

この節では、単一の動詞 have が場合によって使役の意味に解釈されたり、経験の意味に解釈されたりすると考える分析を見ていく。久野・高見(2007)は、Have 構文が使役の意味を表す場合でも、経験の意味を表す場合でも、動詞 have の表す意味はあくまで「～を持つ」という所有の意味であると主張する。

- (6) a. Jim had his house remodeled last month. (使役)  
 b. They had a surveillance camera installed in the fitting rooms. (使役)
- (7) a. She had her wallet stolen. (経験, 被害・迷惑)  
 b. Mary had her article accepted by a high quality journal. (経験, 利益・恩恵)

(久野・高見 (2007: 221))

主語指示物が補文で述べられている事象を意図的に持てば使役の意味になり、非意図的に持てば経験の意味になる。さらに、経験の意味の場合、補文の表す事象が主語指示物にとって好ましい事柄であれば利益・恩恵の意味になり、好ましくない事柄であれば被害・迷惑の意味になる。

「ある事象を意図的に持つ」とか「ある事象を非意図的に持つ」とはどういうことなのか、より明示的にする必要があるだろう。そこで、久野・高見と同様に Have 構文の動詞 have は常に「所有」の意味を表すと仮定する月足 (2000) の分析を参照する。月足は、Have 構文が使役の意味になるか、経験の意味になるかは、補文に含まれる過去分詞の意味と補文全体が表す出来事のあり方に依存すると主張する。よく知られているように、過去分詞は状態の意味を表す場合と出来事の意味を表す場合がある。

- (8) The town was destroyed.
- (9) a. The town was (already) destroyed (when we got there).  
 b. The town was destroyed (house by house).

(月足 (2000: 112))

(8) の受動文の過去分詞は、状態を表しているのか、出来事を表しているのか曖昧であるが、(9) のように語句を補うことによってどちらかの意味に限定される。(9a) の過去分詞は「すでに破壊されていた」という出来事の結果としての状態を表し、(9b) の過去分詞は「一軒一軒破壊されていった」という出来事のプロセスを表す。さらに、Have 構文の補文に状態を表す過去分詞が含まれている場合には、主語指示物は出来事の結果としての状態を所有すると考え、Have 構文の補文に出来事を表す過去分詞が含まれている場合には、主語指示物は出来事のプロセス全体を所有すると考える。

- (10) Kelvin's a great planner. He has to have everything done in a great detail before he'll embark on anything.

(Ikegami (1989: 202))

- (11) The NWWA is already having an independent inquiry carried out by a leading firm of consultant.

(Ikegami (1989: 200))

(10) の例文では, Kelvin は全てが綿密に準備されているという結果としての状態のみを所有するが, (11) の例文では, NWWA は依頼などをして調査を開始させ, その調査が行われている間のプロセス全体を所有することになる。

さて, このように考えるとすると, 出来事の結果状態を所有するということは, その出来事自体は完了してしまっているのに, 主語指示物が自分の意志でコントロールすることはできない。それに対して, 出来事のプロセス全体を所有するということは, その出来事の開始から主語指示物が関与し, コントロールすることができるということになる。中川 (2009: 62-3) でも同様のことが述べられているが, 「ある事象を意図的に持つ」とは, 主語指示物が自らコントロールしてその事象を発生させ, その事象の完了までプロセスの全体を所有するということであり, 「ある事象を非意図的に持つ」とは, 主語指示物が自らの与り知らぬところで発生した事象の結果状態をたまたま所有するということであると考えられる。

以上, Have 構文の動詞 have に「所有」の意味を認める分析を見てきたが, この「所有」の意味は非常に希薄化・抽象化した意味である。Ikegami (1989: 199) は, Have 構文のプロトタイプ的意味は「主語が『目的語+過去分詞』によって記述される事象を経験する」(“The subject experiences an event described by “object + past participle.”) であると述べている。さらに, Ritter and Rosen (1993, 1997) や鷲尾 (1997) では動詞 have は, (ほとんど) 意味を持たないとする分析が提出されている。

鷲尾 (1997: 57) によれば, Have 構文に生じる動詞 have の中核的意味は, 「人と出来事の間何らかの影響関係 (affectedness relation) がある」というもので, しかもその影響関係の方向性も定められていないものであり, 図式化すると (12) のように表される。

(12) 人 — [出来事...]

人が出来事に影響を与える場合が「使役」の意味になり, 出来事が人に影響を与える場合が「経験」の意味になる。

(13) 人 → [出来事...] (使役)

(14) 人 ← [出来事...] (経験)

Ritter and Rosen (1993: 520) によれば, 動詞 have は語彙的意味内容 (lexical semantic content) を持たない機能述語 (functor predicate) であるが, 補文の述語が表す事象を拡張する (extend) 機能を持つ。事象の始点側が拡張されれば, そこに原因・使役 (cause) が付け加えられ, have の主語には使役主の解釈が与えられる。事象の終点側が拡張されれば, そこに結果状態が付け加えられ, have の主語は経験者として解釈される。

(15) John had half the student walk out of his lecture.

<i>walk out</i>	----Walk out of class----
<i>have &amp; walk out</i>	--Cause--   ----Walk out of class-----
	----Walk out of class-----   --Exp.→

(Ritter and Rosen (1993: 525))

これまでに見てきた分析はいずれも Have 構文の動詞 have の意味は一つであり, それが補文の内容や文脈によって使役の意味に解釈されたり, 経験の意味に解釈されたりするというものであった。つまり, 使役の意味の場合も経験の意味の場合も同じ一つの動詞 have が用いられ, Have 構文は一つであるということである。しかし, 次節で見るように, 使役の意味に解釈される場合と経験の意味に解釈される場合で, Have 構文の音韻的・統語的・意味的なふるまいが様々に異なることが観察されており, 上で見てきたような統一的な分析にとって問題になるかもしれない。(以下, 使役の意味を表す Have 構文を「使役 Have 構文」と呼び, 経験の意味を表す Have 構文を「経験 Have 構文」と呼ぶ。)

## 3. 使役 Have 構文と経験 Have 構文の相違

## 3.1 強勢

よく知られているように、使役 Have 構文では通例 have に強勢が置かれ、経験 Have 構文では過去分詞に強勢が置かれる。(例文中、強勢を置かれる単語を大文字で示す。)

- (16) a. She HAD her shoes shined. 「靴を磨いてもらった」(使役)  
 b. We ought to HAVE the injured man examined by a doctor. 「医者にみてもらわなければならない」(使役)
- (17) a. She had a book STOLEN from the library. 「本を盗まれた」(経験)  
 b. The house HAD its roof RIPPED OFF by the gale. 「屋根をはぎ取られた」(経験)

完了の意味でも過去分詞に強勢が置かれる。

- (18) Have the job DONE by tomorrow. 「仕事をしてしまいなさい」(完了)

## 3.2 進行形と 'What happened was...'の補部

Ritter and Rosen (1997: 305-306) に紹介されているように、使役 Have 構文と経験 Have 構文は進行形や 'What happened was...' の補部に現れるかどうかということに関してもふるまいが異なる。

## (19) 使役 Have 構文

- a. John had the students read three articles.
- b. John had Mary walk the dog.
- c. John is having the students read three articles.
- d. John is having Mary walk the dog.
- e. What happened was that John had the students read three articles.
- f. What happened was that John had Mary walk the dog.

## (20) 経験 Have 構文

- a. John had the students walk out of his class.
- b. John had a headache/cold.
- c. \*John is having the students walk out of his class.
- d. \*John is having a headache/cold.
- e. \*What happened was that John had the students walk out of his class.
- f. \*What happened was that John had a head ache/cold.

最も基本的な所有を表す構文もこの環境には現れないが、出来事名詞をとる構文はこの環境に現れる。

## (21) 所有

- a. John had a new car.
- b. John had a hat.
- c. \*John is having a new car.

- d. \*John is having a hat.
- e. \*What happened was that John had a new car.
- f. \*What happened was that John had a hat.

## (22) 出来事名詞

- a. John had a party.
- b. John had a fit.
- c. John is having a party.
- d. John is having a fit.
- e. What happened was that John had a party.
- f. What happened was that John had a fit.

## 3.3 疑問文・否定文における Do-support

Tamura (2004: 201) によれば, 使役 Have 構文と経験 Have 構文は, 疑問文や否定文において Do-support を必要とするかどうかにおいても異なったふるまいを示す. 経験 Have 構文は Do-support を必要としないが, 使役 Have 構文は, Do-support を必要とする.

## (23) 経験 Have 構文

- a. Did you have your watch repaired against your will?
- b. ?Had you your watch repaired against your will?
- c. John didn't have his watch repaired because he refused.
- d. John hadn't his watch repaired because he refused.

## (24) 使役 Have 構文

- a. Did you have Mary's watch repaired there?
- b. \*Had you Mary's watch repaired there?
- c. John didn't have Mary's watch repaired there.
- d. \*John hadn't Mary's watch repaired there.

ここでも, 基本的な所有を表す構文は経験 Have 構文と, 出来事名詞をとる構文は使役 Have 構文と, 並行的にふるまう.

## (25) 所有

- a. Do you have { a book / an idea } ?
- b. Have you { a book / an idea } ?
- c. I didn't have { a book / an idea } .
- d. I hadn't { a book / an idea } .

## (26) 出来事名詞

- a. Do you have { a party / a meeting / a game of tennis } ?
- b. \*Have you { a party / a meeting / a game of tennis } ?
- c. We didn't have { a party / a meeting / a game of tennis } .
- d. \*We hadn't { a party / a meeting / a game of tennis } .

## 3.4 同一指示関係

Ritter and Rosen (1993: 526, 1997:315)は、経験 Have 構文では、主語と補文の名詞句の間に所有関係があるか、または同一指示の心的与格 (ethical dative) がなくてはならないと指摘している。例文 (27) は曖昧でなく、経験の意味を表す。例文 (28a) と (28c) は同一指示の代名詞を含んでおり、経験の意味を表す。例文 (28b) は顕在的な代名詞は含んでいないが、学生たちは John の授業から出て行ったと解釈される。(27b) の例文中の pro は、音形を持たない代名詞を表す)

(27) John had all the undergrads walk out on him.

(Ritter and Rosen (1993: 526))

(28) a. John<sub>i</sub> had the students walk out of his<sub>i</sub> class.

b. John<sub>i</sub> had the students walk out of pro<sub>i</sub> class.

c. John<sub>i</sub> had his<sub>i</sub> daughter accepted at MIT.

(Ritter and Rosen (1997: 315))

また、鷺尾 (1997: 42-55) は、Have 構文の主語が補文の表す出来事に関与しているか排除されているかによる違いとして、使役 Have 構文は関与の状況も排除の状況も記述できるが、経験 Have 構文は関与の状況しか記述できないとしている。

(29) 使役 Have 構文

a. John<sub>i</sub> had his<sub>i</sub> hair cut by a barber he trusts.

b. John<sub>i</sub> had Mary's<sub>j</sub> hair cut by a barber he trusts.

(鷺尾 (1997: 50))

(30) 経験 Have 構文

a. John<sub>i</sub> had his<sub>i</sub> hair cut (too short) by a probationary barber.

b. ??John<sub>i</sub> had Mary's<sub>j</sub> hair cut (too short) by a probationary barber.

(鷺尾 (1997: 50-51))

## 4. 多義による説明

前節では、使役 Have 構文と経験 Have 構文が異なる音韻的・統語的ふるまいを示すこと、そして、使役 Have 構文は出来事名詞をとる have の構文と並行的なふるまいを示し、経験 Have 構文は所有を表す have の構文と並行的なふるまいを示すことを見た。このことから、Ritter and Rosen (1997: 305) や Tamura (2004: 202) が述べているように、使役 Have 構文に含まれる have は動作的 (dynamic) であり、経験 Have 構文に含まれる have は状态的 (stative) であると考えられるだろう。

動詞 have は、ゲルマン語起源で「つかむ、握る」が原義であるが、現代英語における中心義は「(物を) 手に持っている」であろう (『英語多義ネットワーク辞典』 p.448) . この中心義から、特性の類似関係に基づく意義展開 (メタファー) により「(物を) 自分の物として持っている」に広がり、さらに「(家族・友人などを) 持っている」、「(人が) (ものを) 自分のものとして持っている」などに意義展開する。「物」は具象物を表し、「もの」は具象物と抽象的なものの両方を含む。「(人が) (ものを) 自分のものとして持っている」とは、知識・情報・時間・余裕・機会・熱・痛み・感情・考え・義務・権利など、物にたとえられるさまざまなものを持っていることを表す (同書, p.449) . 以上は、状态的な意味の意義展開である。「(物を) 手に持っている」という中心義は、また、プロセスで原因を表すという隣接関係に基づく意義展開 (メトニミー) により、「(物を) 手に取る」の意義に転じる。さらにそこから機能類似に基づく意義展開により「(情報・楽しみなどを) 手に入れる」「(経験などを) 手に入れる」の意義に広がる (同書, 同頁) . 以上は、動作的な意味の意義展開

である。

Have 構文に関しては、『英語多義ネットワーク辞典』(p. 449)では、中心義「(物を)手に持っている」から特性の類似に基づいて「(物・人などを)(ある状態に)しておく」に意義展開するとされている。しかし、ここでは、状態的な意味を表す経験の場合と動作的な意味を表す使役の場合では別々の意義展開の経路をたどると考えたい。また、経験用法の意味も使役用法の意味も、「具象的な物を手に持っている」という中心義から直接的に派生するのではなく、それぞれ、「抽象的なものを自分のものとして持っている」、「抽象的なものを手に入れる」という副意義から派生すると考える。

(31) 中心義「(物を)手に持っている」→主意義「(物を)自分の物として持っている」→副意義「(人が)〈ものを〉自分のものとして持っている」→「〈事象を〉自分のものとして持っている」(経験)

(32) 中心義「(物を)手に持っている」→主意義「(物を)手に取る」→副意義「〈ものを〉手に入れる」→「〈事象を〉手に入れる」(使役)

このように考えるならば、Have 構文が多義であるのは動詞 have が多義であるからだということになる。すなわち、使役 Have 構文に含まれる have は動作的な「〈事象を〉手に入れる」という意味であり、経験 Have 構文に含まれる have は「〈事象を〉自分のものとして持っている」という状態的な意味だからである。

最後に 3.4 節で見た同一指示関係について少し考えておこう。経験 Have 構文において、主語と補文内の名詞句の間に所有関係があるか、または同一指示の心性的与格が必要なのはなぜだろうか。使役 Have 構文の場合は、主語指示物が自らの意志でコントロールして補文の事象を引き起こすのだから、主語指示物とその事象の関係は自ずと明白である。ところが、経験 Have 構文の場合、補文の事象は主語指示物の責任で起こったことではない。柏野 (2004: 181) は、動詞 get を用いる場合と比較して次のように述べている。

(33) 受身を表す「get/have+目的語+過去分詞」の構文において、「エージェント」が認められない場合は、文の主語の側に不注意だったという責任があり、こういうときには get が用いられる。一方、エージェントが認められる場合には、責任は「エージェント」にあり、こういうときには have が用いられる。

たまたま遭遇した事象から主語指示物が被害・迷惑や利益・音形などの影響を受けるという解釈が可能になるには、所有代名詞によって主語指示物とその事象の参加者の間に何らかの関係があることが明示されるか、心性的与格によって主語指示物との利害関係が明示される必要があるのではないだろうか。

## 5. まとめ

動詞 have は、目的語または補文をとり、様々な意味を表す。中でも、補文として名詞句+過去分詞をとる Have 構文は、使役と経験の二通りの意味を表し興味深い。本稿では、動詞 have の意味を中心として、Have 構文が曖昧性を示す理由を考察してきた。

久野・高見 (2007)、月足 (2000)、Ritter and Rosen (1993, 1997)、鷲見 (1997) などでは、使役の意味の場合も経験の意味の場合も、動詞 have の意味は同一であるとされている。久野・高見と月足は、have はあくまで「所有」を意味するとしている。鷲尾は、have は影響関係を表すとする。Ritter and Rosen は、have は固有の意味を持たない機能述語であるとする。このような分析では、Have 構文の意味は、補文に含まれる過去分詞の意味や補文全体が表す事象のあり方、文脈や社会常識によって左右されることになる。

しかし、使役の have と経験の have とでは、音韻的・統語的なふるまいが異なる。使役の have には強勢が置かれるが、経験の have には強勢が置かれない。疑問文や否定文において、使役の have は Do-support を必要とするが、経験の have は Do-support を必要としない。使役 Have 構文は、出来事名詞を補部にとる have の構文と並行的で、進行形になったり、'What happened was...'の補部に現れたりするので、使役の have は動作的な意味を持つ動詞であると考えられる。一方、経験 Have 構文は、所有を表す have の構文と並行的で、進行形にならず、'What happened was...'の補部にも現れないので、経験の have は状態的な意味を表す動詞であると考えられる。動詞 have

の経験の意味と使役の意味は、それぞれ (31, 32) に示したような別々の意義展開の経路によって派生したものと考えられる。

- (33) 中心義「(物を) 手に持っている」→主意義「(物を) 自分の物として持っている」→副意義「(人が) (ものを) 自分のものとして持っている」→「(事象を) 自分のものとして持っている」(経験)
- (34) 中心義「(物を) 手に持っている」→主意義「(物を) 手に取る」→副意義「(ものを) 手に入れる」→「(事象を) 手に入れる」(使役)

#### 参考文献

- Ikegami, Y. (1989) HAVE + object + past participle' and 'GET + object + past participle' in the SEU corpus. In U. Fries and M. Heusser (eds.), *Meaning and Beyond: Ernst Leisi zum 70. Geburtstag* (pp.197-213). Tübingen: Gunter Narr.
- 柏野健次 (2004) 『get/have+目的語+過去分詞』の構文をめぐって『英語語法文法研究』11, 180-185. 英語語法文法学会.
- 久野・高見健一 (2007) 『英語の構文とその意味—生成文法と機能的構文論』開拓社.
- 中川明 (2009) 「Have+目的語+過去分詞構文における二義性について: 使役と経験」『英語文化学会論集』18, 57-64.
- Ritter, E. and S.T. Rosen (1993) Deriving causation. *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 519-555
- Ritter, E. and S.T. Rosen (1997) The function of *have*. *Lingua* 101, 295-321
- Tamura, T. (2004) On causative and experiential HAVE constructions. *Tsukuba English Studies*, 22, 191-203.
- Tomozawa, H. (2002) A semantic analysis of causative and experiential HAVE. *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*, 43(1), 1-9.
- 月足亜由美 (2000) 「Have+Object+Past Participle 構文における動詞 *have* と補文の意味」『鹿児島工業高等専門学校研究報告』35, 109-116.
- 月足亜由美 (2004) 「*have*+目的語 / 補文構文のスキーマ的意味」『甲南女子大学研究紀要』40, 61-69.
- 鷺尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」中右実編『ヴォイスとアスペクト』(pp.1-106) 研究社.

#### 辞典

『英語基本動詞辞典』研究社.

『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

平成28年 (2016) 10月12日受理

平成28年 (2016) 12月31日発行